



○ 避難訓練から

火事対応経験の第二弾です。私が住んでいる地区でも春祭や秋祭があります。農業地区なので作物がよく育つように、害虫の被害が出ないように、また、収穫への感謝などの内容で神主さんに祝詞をあげてもらいます。小ぢんまりとした祭ですが毎年同じように行います。年ごとに当屋(担当・世話役)が回ってきます。祭の前には数人で回りの落ち葉を掃いたり、お社を清掃したりします。私がその当屋になった年です。いつものように掃いた落ち葉は焼却して処分しました。とりあえず終わったなということでみんなが帰宅しました。私も家に帰ったのですがなんとなく嫌な予感がして、もう一度現場に戻ってみました。燃やしたところはほぼ灰の状態になっていて炎はありません。ほっとして上を見てみるとそこに炎がありました。5~6mくらい上の木のうろ(樹洞)のようなところに30cmくらいの小さな火があるではありませんか! 私の脳裏には裏山が大火事になっている状況が浮かびました。あせりました。お社は山のほうに存在しており、近くに家もなく人を呼べません。携帯電話も持っていなかったので消防にも連絡できません。自分だけでどうにかしなければと思いましたが、水道設備はありません。すぐそばのちょろちょろと流れる水場があるだけです。清掃に使った時のバケツを持ってその水を汲みに行きましたが、バケツにたまる時間がもどかしかったです。ようやくたまって、その火をめがけてバケツの水を投げかけましたが、当たりません! 2回くらい挑戦しましたがダメでした。3回目から私は水の入ったバケツを口に咥(くわ)えてよじ登りました。(火のある場所までは枝がなかったので片手では登れません。)ようやく火を消すことはできましたが、うろの奥のほうに火種が残っているかもしれません。よじ登る作業を数回繰り返しました。それでも心配なので数時間くらいはそこに居続けたように記憶しています。20数年くらい昔の話です。それ以来焼却作業はしていません。

長い説明文になりましたが、ここまで細かく表現できるほど衝撃的な出来事だったわけです。後で思ったことです。ときどき山火事などのニュースで亡くなられた方のことが伝えられます。それまでは火の回りが早く、逃げ遅れてしまったのだらうと想像していました。しかし上述のような経験から私は“逃げようと思えば逃げられたらうけれど火を出してしまったことへの驚きと「どうにかしなければ!」という責任感から、逃げずに消火活動をしているうちに逃げられなくなった”というケースも多いのではなかろうかと思っています。それにしても水の入った重いバケツを咥えてよく登れたなど後から思いました。“火事場の馬鹿力”というのはこういうことをいうのでしょうかね。

あと二つ体験談があります。 つづく(?)かな? …

○ 自校自賛

ヤマボウシ(山法師) サツキ(皐月)

KC校の玄関脇に育っています。ヤマボウシは昨年晩夏に突然原因不明の落葉があり、枯れるのではないかと心配していましたが無事でした。ツツジとサツキは見分けにくいですが、花が小さく今は5月の中旬になろうとしていますのでこれはサツキでしょう。

右2枚の写真は訓練の様子です。どのクラスも座学だったようで、コックコート姿はありませんでした。

